

海外に発展した明治時代の美濃窯

「明治時代における海外発展の要因とその特色」

松田 千晴

一 はじめに

古代より濃尾平野において展開されてきた陶磁器（註1）生産は、日本窯業史上重要な位置を占めてきた。

古代から近世初頭において美濃窯（よう）及び瀬戸窯で生産された施釉陶器は、中国大陸からもたらされる陶磁器（最高級品）に次ぐ高級品として上層階級に受け入れられるとともに、美濃窯は釉薬の開発や美濃大窯・連房式登り窯に代表されるような先端技術の開発・導入によって美濃古陶（茶陶）と呼ばれる日本独特の文化を華開かせた。江戸時代初頭に九州有田で生産が開始された磁器により畿内の重要な市場が奪われ始めると、美濃窯及び瀬戸窯は一般庶民への量産品供給という新たな市場の開拓（註2）に取り組みとともに、やがては磁器の製法を習得して生産に入り、名工の活躍によって海外に発展する足場を固めるのであった。

本稿では先学の研究に基づき、美濃窯及び瀬戸窯が長い歴史の中でどのように生産活動を展開してきたのか概観し、明治時代に海外に向けて発展したといわれる美濃窯の発展の要因とその特色を明らかにしたいと考える。

二 濃尾平野における陶磁器生産の概観

原料陶土と焼成用燃料に恵まれた猿投（さなげ）窯に始まる高級施釉陶器の生産活動が、技術の伝播や工人の移動などによって瀬戸窯さらには美濃窯に広がる（あるいは生産活動の中心が移る）とともに、江戸時代後期には磁

器の生産にも成功し、今日にいたるまで日本の陶磁器生産の一大中心地としての地位を保ち続けている状況を「表1 濃尾平野における陶磁器生産の概観」に整理した。

ちなみに、「製品」欄にはそれぞれの時代に美濃窯で生産されていた代表的な焼き物の総称を、「窯」（かま）欄には美濃窯でそれぞれの時代に使用されていた代表的な焼成窯を、「備考」欄には美濃窯におけるそれぞれの時代の代表的な窯跡及び製品などを記した。

この表1から、美濃窯及び瀬戸窯が時代によって浮沈を繰り返しながらも、長い歴史の中で培った技術と伝統・他の産地から見れば無尽蔵とも思える豊富な原料陶土と焼成用燃料を背景に陶磁器を大量生産し、市場に供給してきたことが分かる。

三 明治時代における美濃窯及び瀬戸窯の発展

江戸時代に陶磁器の生産を行っていた窯の多くは、明治維新によって大名諸侯の保護を失って衰退を余儀なくされたが、明治政府の殖産興業政策によって海外への発展の機会が与えられ、江戸時代とは異なる陶磁器生産の様相（産地や製品など）を呈するようになってきた。

（1）磁器による欧米市場の開拓

日本では従来から陶器の生産が盛んであったが、明治時代に入って欧米市場開拓の先兵となるのは磁器であった。

前述のように、陶器は茶陶と呼ばれる日本独自の文化を生み出しているにもかかわらず、明治政府の支援（註3）を受け万国博覧会を起爆剤にして欧米市場を開拓するのが磁器（特に九谷風あるいは薩摩風の上絵を施したもの）となった背景には、次のような理由があった（註4）と考えられている。

① 明治維新以後、全国各地の陶器生産窯が大名諸侯による保護を失って

衰退していた。

② 慶応三年（一八六七）の第二回パリ万国博覧会以来、欧米諸国の関心は磁器に集まっていた。

（2） 輸出用磁器制作の動向

日本の磁器の欧米への輸出は、江戸時代前期のオランダ東印度会社による伊万里焼の大量買い付けに始まるが、日本人による輸出への積極的な取り組みは幕末以降のことであった。

瀬戸窯においては安政五年（一八五八）に輸出用洋食器の注文が入り、美濃窯においても翌六年には輸出品制作を打診されている。九谷では、明治元年（一八六八）に輸出用素地（きじ）の焼成窯が築かれた（註5）。

輸出用美術工芸品の制作に目を向けると、江戸時代にはほとんど陶磁器産業が見られなかった東京（明治六年に瓢池園が設立など）や横浜（後に帝室技芸員となる宮川香山の真葛焼の開窯）に全国各地の優秀な画工が集まり、同八年には有田においても香蘭社が設立されている。

（3） 輸出用磁器の生産地

磁器の生産地として古くから欧米に知られていたのは有田であり、優秀な画工（上絵付師）を多く抱えていたのは京都や九谷・薩摩・東京であった。

もともと優秀な画工というのは大名諸侯が保護する窯で育成・活動するものであったが、明治維新によって保護が失われるのと同時に、画工を全国に解放することにもなったのである（註6）。

明治七年（一八七四）の府県別窯業生産額を見ると岐阜県が二六・四％を占めて第一位、次いで愛知県となっている（註7）が、その実状に目を向けると岐阜県の場合は安価な日常雑器が主要製品（註8）であった。美濃窯及び瀬戸窯が全国屈指の陶磁器生産地であったということは確かであるが、有田や京都・九谷・薩摩・東京・横浜といった芸術性の高い美術工芸品を制作する地域とは大きな隔たりがあったといえる。

ところが、有田の場合は外国商館が集中する横浜や神戸（いわゆる商館貿易）からは遠く離れて不便であり、京都の場合は原料事情が悪く（註9）需要の大きい洋食器の生産に対応することが難しかった。そのような状況下にあつて、豊富な原料と零細経営の生産者を擁する美濃窯及び瀬戸窯は安価な日常雑器の生産地として注目を集めるようになってきた。国際競争力を高めるために、仕入れ価格を低く抑えようとする商社が美濃窯及び瀬戸窯の製品を買い入れるようになったのである（註10）。

また、美濃窯及び瀬戸窯が有田や京都に対して輸出用製品を生産する上で優位に立っていた背景には、染付（下絵付）が主流で上絵付の伝統がなく、海外市場の動向に柔軟に対応できたことがあつた（註11）と考えられている。

（4） 輸出用磁器の取扱い業者

最も早い段階から磁器の輸出に乗り出したのは、前述のように開国を受けて幕末の瀬戸窯に輸出用製品を発注した三井組であつた。

その後、明治七年に政府の後援で東京京橋に設立された起立工商会社（創設者は茶商松尾儀助）や同一〇年に米国ニューヨークに森村ブラザーズの看板を上げた森村組（創設者は森村市左衛門・豊兄弟）をはじめ、各地の陶磁器問屋や絵付工場の経営者たちが、磁器の輸出に乗り出してきた。

ただし、陶磁器生産者の大部分は零細経営であり、独自に製品を輸出することはもとより望むべくもなかった（註12）。

（5） 陶磁器の集散地名古屋の発展

輸出の便を考えつつ仕入れ単価を低く抑える必要が生じたとき、商業資本が注目したのは、安価な製品の供給地としての美濃窯及び瀬戸窯を後背地にもつ名古屋であつた。

この時代、名古屋にあって磁器の輸出に携わつたのは、同市の瀧藤万治郎（明治一六年に上絵付工場を開設）や佐治春蔵・江戸時代の長崎で有田焼の輸出を行っていた田代商店（明治二〇年前後に名古屋に進出）や同店の縁者

にあたる松村九助（明治二〇年前後に名古屋に進出）・森村組（明治二三年に名古屋に出張所を開設）・美濃国土岐郡多治見村の西浦円治（西浦焼の工房を明治二二年から名古屋に開設）（註13）などであった。

上絵付の伝統をもたない名古屋に進出した商業資本は、本来は陶磁器の集散地であったこの地に欧米の需要が見込まれる画風を備えた九谷焼の画工を競って呼び寄せ、素地を美濃窯及び瀬戸窯から取り寄せて上絵付（図案は九谷様金襴彩色の花鳥風月など）を施しはじめた。明治一六年（一八八三）頃には同市東北部に上絵付工場が集中し、職工数も千名を超えた（註14）といわれる。

（6）美濃窯の海外進出

名古屋や東京・横浜・京都などで制作されていた欧米向けの磁器というのは、九谷や薩摩の上絵付技法を施した中高級品であった。

ところが、同時代の美濃窯にあつては、安価な絵付技法である摺絵（後に銅版絵付）技法を用いることによってアジア諸国（主に清国）向けの日常雑器（低級品）を大量生産していた。しかも、美濃窯では、原料陶土ともかわって市之倉（現多治見市の内）の盃・土岐津（現土岐市の内）の煎茶碗・妻木（現土岐市の内）や滝呂（現多治見市の内）の珈琲碗皿・駄知（現土岐市の内）の井及び皿・下石（おろし 現土岐市の内）の徳利・笠原（現笠原町の内）や瑞浪（現瑞浪市の内）の茶漬け茶碗というように地域ごとに生産する種類を限定し、未熟練労働力を組織化して、低価格の生産体制を確立していったのである（註15）。

その結果、日本国内やアジア諸国といった市場は美濃窯の独断場となったが、窯元は零細で地元商業資本（主に多治見の陶器商）の支配下（いわゆる仕送り窯）に置かれていった（註16）。

なお、美濃窯に隣接する瀬戸窯の窯元の場合は、名工の活躍とは別に、名古屋に進出した森村組や田代商店・松村九助など大手の商業資本の支配下に

置かれ、欧米諸国向けの中高級品生産に活路を見出し出していた（註17）。

四 おわりに

明治期に入った美濃窯は地の利を生かして、名古屋に進出した商業資本との関係を深める中で、欧米向けの美術工芸品あるいは中高級品制作の一翼を担うとともに、中期から後期にかけて美濃窯で開発された摺絵技法をはじめ銅版絵付技法や石版絵付技法を駆使して日本国内及びアジア諸国の市場を席卷していった。

しかし、美術工芸品の制作とはいっても、美濃窯が携わったのは珈琲碗皿を中心とする洋食器類の素地の生産であり、高度な技術を要する上絵付は商業資本が深く関わる名古屋の工房で施されていたのである。このような美濃窯の実状をふまえたとき、市之倉にあつてパリ万国博覧会で入賞した染付の名工加藤五輔や、九谷の優秀な画工をその工房に多数集めて世界的水準に達する美術工芸品の量産を目指した西浦焼の西浦円治などは、例外中の例外であったと考えられる。

また、美濃窯が日本国内及びアジア諸国の市場を独占した背景には、豊富な原料陶土と低廉な労働力をもって、他の陶磁器産地を圧倒しうるほどの安価かつ大量の製品を供給する生産体制の確立があった。ただし、単価の低い製品（日常雑器）を大量に提供する姿勢は、市場が縮小する不況下にあつては生産工程の簡略化に向かい、ひいては美濃焼の悪評へとつながる粗製濫造に直結する危険性を内包していた。

【註及び参考文献】

- 1…『日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨』（植崎彰一編集 平凡社 昭和五五年） 八五頁

『日本史小百科 陶磁』（佐々木達夫 近藤出版社 平成三年）

いわゆる陶磁器は、土器・陶器・炆器（せつき）・磁器に分けられる。土器と陶器は広い意味で陶器と呼ばれ、一般に粘土を原料とし、やや吸水性がある。炆器と磁器は広い意味で磁器と呼ばれ、石英や長石などの粉末を原料とし、吸水性が小さい。

原料・釉薬の有無・素地（きじ）の硬さや色合い・吸水性・透明性といった点から土器・陶器・炆器・磁器を見たとき、次のような特徴があげられる。

土器（縄文式土器や弥生式土器・土師器・須恵器など）は七〇〇～八〇〇度という低温で焼成され、もろいうえに多孔質のため吸水性が大きく、釉薬は施されない。

陶器（奈良三彩や瓷器・古瀬戸・茶陶など）は釉薬が施され、吸水性は小さい。

炆器（備前や常滑の甕・播鉢など）は、土器の場合に近い質の悪い粘土を原料とし、釉薬は施さず、一二〇〇～一三〇〇度という高温で焼成される。素地は陶器と磁器の中間の硬さで、吸水性は小さい。

磁器（有田など）は釉薬が施され、一二五〇～一四〇〇度の高温で焼成される。硬質でガラス化が進んでいて、吸水性は小さい。

狭い意味での陶器は土器が進歩したもので、素地が十分焼き締まらず吸水性があり、不透明で、その上に光沢のある釉薬を施した焼き物を指す。また、磁器とは素地がよく焼き締まってガラス化し、吸水性のない、純白透明感のある焼き物を指す。

2…『江戸の食文化』（江戸遺跡研究会編 吉川弘文館 平成四年）

江戸時代前期から後期にかけての美濃窯は、茶の湯の世界の質的な変化に対応することが困難となり、新しく誕生した大消費都市・江戸の庶民を対象とした陶器（日常雑器）の大量生産に向かった。

3…博覧会事務局は明治五年に付属陶磁製造所を設け、有田や瀬戸から素地を取り寄せ、各地から絵付師を集めて出品作品の制作にあたった。

4…『近代の陶磁器と窯業』（塩田力蔵 大阪屋号書店 昭和四年） 一七頁

『概説 近代陶業史』（三井弘三 日本陶業連盟 昭和五四年） 五頁

5…『九谷焼三三〇年史』（寺井町九谷焼資料館 昭和六一年） 四六三頁

6…『日本学術論叢 5 近代陶磁器業の成立』（奈良本辰也 伊藤書店 昭和一八年） 二四頁

7…『岐阜県史 通史編・近代中』（岐阜県 昭和四五年） 八六二頁

8…『岐阜県史 通史編・近代中』 八六六頁

9…『前掲『日本学術論叢 5 近代陶磁器業の成立』 二二頁

『日本輸出陶磁器史』（名古屋陶磁器会館 昭和四二年） 三三三頁

10…『前掲『概説 近代陶業史』 一二頁

11…『前掲『概説 近代陶業史』 一二頁

12…『陶業振興の核心』（伊勢本一郎 技報堂 昭和三二年） 五頁

『前掲『概説 近代陶業史』 二〇頁

13…『前掲『日本輸出陶磁器史』 三一頁

『前掲『概説 近代陶業史』 一一、二〇～二二頁

14…『海を行く陶磁器』（道家静夫 窯業タイムス社 昭和二九年） 四三頁

『前掲『日本輸出陶磁器史』 三二、三三三頁

『前掲『概説 近代陶業史』 一三頁

15…『前掲『日本輸出陶磁器史』 三六～三七頁

『前掲『概説 近代陶業史』 二二頁

16…『前掲『概説 近代陶業史』 二二～二二頁

17…『前掲『概説 近代陶業史』 二二～二三頁

表1 濃尾平野における陶磁器生産の概観

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考(美濃窯関係)
11 C	平安 白瓷	<p>高火度焼成の平安灰釉陶器(瓷器)が、高度な製作技術とそれにあう原料陶土に恵まれた東海地方で生産される。</p> <p>○奈良時代末から平安時代にかけて、白瓷(しらし 平安灰釉陶器:宋の白磁の模倣)が愛知県の猿投窯などを中心に、東海地方一円で生産される。 中国陶磁に次ぐ高級陶器(律令に基づく貢納品:尾張と長門の2国のみ)として珍重される。</p>	<p>□猿投窯の窯数が減少し、美濃窯の窯数が増加傾向(量産)を示す。 多治見から生産が始まり、恵那・中津川方面にまで生産地が拡大していったと考えられる。</p>	<p>窖窯</p>	<p>*美濃窯には平安後期の白瓷窯が100基余</p> <p>*美濃窯では一般庶民を対象とした雑器の大量生産</p> <p>*灰釉陶器が主であるが、まれに緑釉陶器も</p>
	平安末／鎌倉初 白瓷系陶器	<p>中国陶磁の輸入が増大し、これまで白瓷を使用していた貴族や官衛(かんが)・社寺・富裕農民が中国陶磁に切り替え、白瓷の需要が激減する。</p> <p>○一般庶民向けとしての無釉の白瓷系陶器(山茶碗:日常雑器)が猿投窯を中心に生産され、周辺地域に出荷される。 ●灰釉技法を放棄して雑器の量産体制に入る。 ○常滑窯では壺や甕といった大型貯蔵容器を生産し、全国に供給を開始する。</p> <p>○瀬戸窯では、南宋から明にいたる中国陶器をうつした高級施釉(灰釉や鉄釉)陶器いわゆる古瀬戸が生産され、全国の上層階級に向けて供給される。 ※瀬戸市陶彦神社 陶祖加藤景正</p>	<p>□平安時代末から室町時代中頃にかけて白瓷系陶器が生産される。</p> <p>□東濃一円で、猿投窯を圧倒する雑器(均質手山茶碗)の量産が行われる。 □燃料の欠乏によって白瓷系陶器の生産は衰退する。</p>	<p>窖窯</p> <p>窖窯</p>	<p>*美濃窯には鎌倉時代から室町時代中頃にかけての白瓷系陶器窯が250基余</p> <p>*現多治見市域の土岐川以北が伊勢神領(池田御厨)であったからか、白瓷窯及び白瓷系陶器窯の40%が集中 赤根曾窯などから「大一」「大二」の押印のある陶片が出土</p>
14 C					

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考（美濃窯関係）
15 C 南北朝	古瀬戸系施釉陶器	<p>古瀬戸の生産技術を身につけた瀬戸窯の工人が美濃に移住するも、先住の山茶碗生産の工人との間に、燃料や原料陶土などの確保にともなう対立が生じたため、領主・妻木氏の保護を受ける。</p> <p>○農業技術の進展にともなう需要から常滑窯で甕が盛んに生産される。</p>	<p>□古瀬戸に類似した古瀬戸系施釉陶器が、美濃窯においても生産される。</p> <p>□発見された古瀬戸系施釉陶器の焼成窯は7基にすぎず、限られた範囲に供給していたと考えられる。</p>	窖窯	<p>*15世紀の前後に古瀬戸の技術をもった瀬戸窯の工人が美濃入り（妻木領：現土岐市域）</p> <p>I期 II期 大洞穴弘法窯（土岐市） III期 下石西山窯（土岐市） 下石東山窯（土岐市） IV期 日向窯（土岐市）</p>
16 C 室町後期		<p>広大な未開発地を擁し、豊富な原料陶土に恵まれた美濃窯は、名門土岐氏の本拠地という政治力を背景に畿内消費都市や全国の戦国城下町を商圏として成長する。</p> <p>●開発の限界に達していた瀬戸窯は深刻な不振に陥る。</p> <p>●瀬戸窯の工人は、新天地を求めて、美濃に移住する。 「瀬戸山離散」</p> <p>●瀬戸の不振は、この時代に入っても続いている。</p>	<p>□大窯にて施釉陶器を生産する。</p> <p>□瀬戸窯の工人加藤五郎右衛門景久たちが信長の朱印状によって美濃国に入る。</p> <p>※可見市久々利大平元祖景久の碑</p> <p>□茶の湯の流行によって、茶陶の発注を受けるようになる。生産にたずさわったのは、集団化された専門技術者である。</p> <p>※多治見市平野公園陶祖景光の碑</p> <p>※可見市久々利大萱景久の子景成の碑（志野焼の創始者）</p>	美濃大窯・還元炎焼成	<p>*中国陶磁（白磁や青磁など）に近づける段階で各種の釉薬や技術を開発 ただし、鉄釉と灰釉は全期を通じて使用</p> <p>I期 小名田窯下窯（多治見） II期 妙土窯（笠原町） ※銅緑釉と瀬戸黒 III期 小名田尼ケ根1号窯（多治見） ※志野釉と黄瀬戸タンパン IV期 山之神・浅間窯（可見市） ※鉄釉による絵付の志野 V期 牟田洞窯（可見市） ※紅志野・赤志野・鼠志野・織部黒大窯という焼成火度の高い新式の窯では、釉薬に様々な変化が発生（高級食器類）</p> <p>*唐津写し的美濃唐津が誕生</p>
	美濃古陶	<p>連房式登り窯の操業を背景に畿内に進出してきた唐津焼に押され、美濃窯は畿内という有力な市場を失っていく。 美濃窯の立て直しには、例えば連房式登り窯技術の導入による、効率のよい生産体制の構築が急務となる。</p>			
	安土・桃山				

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考（美濃窯関係）	
19 C	江戸中期	17世紀末から18世紀にかけての天候異変による全国的な不況を背景に、瀬戸の窯元から元禄年間（1688～1704）に尾張藩に出された上訴によって、美濃の窯株は天領御免の24株にしぼらざるを得ない状況となる。		連房式登り窯・酸化炎焼成 連房式登り窯・還元炎焼成	寛政8年（1796）、笠松代官鈴木門三郎によって窯株が確立 * 有田より200年遅れた磁器の生産開始(磁器量産の時代) 素地原料の選択から絵付の方法にいたるまで有田の模倣 * 笠原において年号入りの太白茶碗が出土	
	江戸後期	●瀬戸窯の生産は、衰退の一途をたどっている。 わずかの窯で、灰釉・鉄釉・御深井釉の日常雑器を細々と生産する。 ○磁祖加藤民吉によって、有田の磁器の製法が瀬戸窯に伝えられる。 陶器は本業、磁器は新製焼あるいは染付と呼ばれる。 ※瀬戸市窯神社 民吉の銅像 ○瀬戸村：4代川本半助が染付の品質向上に成功し、天保末頃より良質の染付が焼かれるようになる。	□駄知の糸目土瓶は岩村藩主松平能登守の推奨もあり、能登様土瓶と呼ばれて全国に知られる。 □新製もの（磁器）が市之倉（現多治見市）で焼かれ始める。 □磁器の生産にともなって上絵付の技法が伝わる。			* 嘉永2年（1849）、江戸城本丸・西丸御用の焼き物（磁器の記録有）を市之倉で生産 * 嘉永3年、小里村の2代和田亀右衛門が製土・石粉製造に着目し、水車による千本杵搗法を創始（従来は石臼手杵法） 以後、水量に恵まれた小里川流域に石粉水車が軒を並べて窯業原料製造を展開
	幕末	安政元年（1854）の「日米和親条約」及び同5年の「日米修好通商条約」の締結によって開国となり、横浜交易が始まる。				○安政5年（1858）、三井組の注文を受けた加藤鎌介が、輸出品の見本を川本半助や井上治郎らに焼かせる。 瀬戸における輸出の始まりとなる。 ○文久2年（1862）、5代川本半助が分家して川本枅吉を名乗り、輸出を推進する。 ○磁器の影に隠れがちの本業方面で、名工春岱が活躍する。

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考(美濃窯関係)
19 C 明治	磁器	<p>○6代川本半助は、輸出用陶磁胎七宝の素地を作って名古屋の七宝会社や横浜の輸出会社・東京の七宝工房に出荷する。</p> <p>○明治4年(1871)、名古屋に七宝焼専門の「七宝会社」が設立(～1890)される。名工竹内忠兵衛らをかかえて、万博に多くの作品を出品する。</p> <p>幕末から明治初期に開発された陶磁胎七宝の製法によって生産された美術工芸品は、万博に出品されて海外に販路を広げていく。</p> <p>○瀬戸窯が陶磁胎七宝の素地を供給する。</p> <p>○6代川本半助は、明治9年(1876)にフィラデルフィアで開催されたアメリカ独立百年記念万博や明治11年(1878)のパリ万博で入賞する一方、第1回から第4回までの内国勸業博覧会に出品して2回入賞し、瀬戸窯を代表する名工に数えられる。</p>	<p>□明治7年(1874)の陶磁器生産額は全国26.4%・第1位。ただし実状は、家内工業的零細窯で日常雑器(安価な製品)を大量生産し、安売りに走っている。</p> <p>□市之倉・根本・荻之等の染付については、名声を博す。</p> <p>□殖産興業をめざす明治政府の影響を受け、多治見の4代西浦円治は海外進出に積極的に取り組む。西浦による本格的な輸出は、明治10年代後半から同20年代である。</p> <p>【初期】市之倉の手窯で精巧な染付 【中期】多治見で外国向上絵付 【後期】名古屋で輸出用の白素地物・和物の染付・吹絵の装飾品</p> <p>□有田が伝統的な高級品や美術品を輸出していたのに対して、美濃窯からは日用飲食器を中心に輸出される。多治見からは珈琲碗皿・土瓶・花瓶などが輸出される。</p>	連房式登り窯・還元炎焼成	<p>*明治5年(1872)、美濃焼の生産・販売の自由化(窯株制度の廃止) 多治見が美濃焼の集散地</p> <p>▼陶磁器製造業者に対する陶磁器商の立場が強大となり、仕送り窯制度が浸透</p> <p>*明治11年のパリ万博に加藤五輔が出品して最高の名誉賞を受賞</p> <p>*明治12年(1879)のシドニー万博の際は4代西浦円治が県内出品者の総代となり、視察員を派遣</p> <p>*近世以来の名古屋陶磁器商への従属状況からの脱却を願って、美濃焼産地では商業会社設立の気運 米国や中国などの市場開拓 明治13年 多治見村 4代西浦円治の「濃陶社」 明治13年 土岐郡高山村 深萱英次の「陶器会社」 明治14年 土岐郡妻木村 日東文平の「盛陶会社」 明治14年 恵那郡猿爪村 曾根庄兵衛の「濃讓商社」 明治14年 土岐郡下石村 林蔦治郎の「陶隆商社」 明治14年 多治見村 加藤善兵衛の「濃磁会社」 明治14年 土岐郡駄知村 加藤休之助の「美陶社」 明治14年 恵那郡苗木村 山下彦太の「殖産会社」 明治15年 安八郡大垣町 安田信一の「陶器会社」</p>

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考（美濃窯関係）
19 C	明治	<p>明治14年（1881）、松方正義が大蔵脚に就き、西南戦争などで膨脹した不換紙幣の整理に着手した結果、全国的な大不況となる。</p> <p>○明治14年、川本枏吉らは陶磁器の輸出を目的とする「磁工社」を東京に、「瀬戸磁工社」を瀬戸に設立する。</p>	<p>□明治15～16年に、脇之島の上田幸右衛門が型紙による染付の摺絵技法を開発する。</p> <p>■好況だった美濃焼も生産過剰で価格は下落し、一挙に不況となる。</p> <p>■家族労働への依存・生産制限・海外市場の開拓によって、不況を乗り越えようとする。</p> <p>□中国（清国）市場の開拓によって不況を乗り越える。</p>	連房式登り窯・還元炎焼成	<p>*安価な雑器の大量生産を支えた背景には、家族労働を中心とした半農半工の生活（自給的農業） 収支に考えが及ばない濫造生産と零細経営</p> <p>*絵付を施した日用雑器の量産化が可能</p> <p>*明治19年（1886）、美濃陶磁業組合が結成され、生産調整を実行 同一品種の生産地を制限 陶磁器の改良 後継者の育成 市場の開拓 博覧会や品評会への出品の便宜 明治28年（1895）には岐阜県陶磁業組合と改称</p>
	摺絵	<p>明治18年頃から一般市況が好転する。</p> <p>○明治20年（1887）、川本枏吉の養子秀雄（2代枏吉）らは「日本陶磁会社」を東京に設立して販路の拡大を図る。</p> <p>○2代川本枏吉は名工をはじめ多くの職工をかかえる工場を経営し、美術工芸品と日用品を生産するとともに、第3回内国勸業博覧会にも出品して入賞を果たす。</p> <p>○名古屋には上絵付工場が多く集まり、輸出陶磁器の加工及び売買の中心地に発展する。</p> <p>○名古屋金襴焼が華開く。</p>	<p>□品質向上・技術刷新の気運が高まる。</p> <p>□東京で名工と呼ばれた成瀬誠志が郷里の恵那郡茄子川村（現中津川市）に帰り、美術工芸品の制作を開始する。</p> <p>□明治20年、呉須一色の染付にあきたらなくなった5代目西浦円治は、職工を集めて多治見村に上絵付工房を設立する。</p> <p>□明治22年（1889）、多治見村に不便を感じた5代目西浦円治は、上絵付工房を名古屋に移転する。</p>	<p>*猿爪村の中村弥九郎が太白焼素地の研究に成功して輸出用陶磁器製造に貢献 妻木村の水野勤兵衛がフランス様珈琲碗皿の製造に成功</p> <p>▼多治見村や陶村の輸出製品は素地のまま名古屋の商館・商社に出荷</p> <p>*西浦焼の輸出品は珈琲碗皿・乳入れ・水差しなど 名工による手描きの花鳥・人物を主とした精巧な輸出品の製造</p>	
	誠志焼				
	西浦焼				

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考（美濃窯関係）
19 C	明治 西浦焼	<p>○陶磁器の輸出が盛んになると、素地は陶磁器産地で生産し、絵付は東京・横浜・名古屋で施すという地域分業化が進む。</p> <p>●明治20年代を境として、美術工芸面より産業面が重要視されるようになり、明治中期から後期にかけて粗製濫造の「瀬戸もの」が主流になっていく。</p>	<p>□優秀な上絵付技術と手描染模様の西浦焼は、美濃焼の最高級品として名声を博し、美濃焼に対する認識を一新させる。</p> <p>□明治22年、加藤米治郎・加藤元次郎らが下絵銅版による染付の摺絵技法を開発する。</p>	連房式登り窯・還元炎焼成	<p>* 下絵銅版技法による製品は、国内及びアジア（主に清国）向けの食器</p> <p>* 欧米向けは、名工による手描き</p> <p>▼明治24年の濃尾震災によって美濃窯は壊滅状態</p> <p>* 国内向け製品が中心であった笠原村滝呂が輸出向け製品主体に転向</p>
	下絵銅版	<p>明治27年（1894）の日清戦争後は、陶磁器の輸出が盛んになるも、国内向けについては不振が続く。</p>	<p>□明治28年、加藤小三郎らが上絵銅版転写技法を開発する。</p> <p>□明治28年、土岐津町高山に陶磁器講習所が設立される。</p>		
	上絵銅版	<p>○明治28年、瀬戸陶器学校（県立瀬戸窯業高校の前身）が開校される。</p> <p>○明治32年（1899）、瀬戸陶磁器同業組合が設立され、直営事業として原料の精製工場を設置し、品評会・協議会・講習会などの事業を展開する。</p> <p>○明治34年（1901）、瀬戸陶器学校敷地内に瀬戸陶磁器試験場を設置して、石炭窯の研究を始める。</p> <p>○明治34年、瀬戸自動鉄道株式会社が設立され、同38年（1905）には瀬戸～矢田間が開通する。同39年の電化に伴って瀬戸電気鉄道と改称され、中央線や堀川の水運と結合、瀬戸の大動脈となる。</p>	<p>□明治28年、加藤小三郎らが上絵銅版転写技法を開発する。</p> <p>□明治28年、土岐津町高山に陶磁器講習所が設立される。</p> <p>□明治34年、多治見町の小栗国次郎が石版（上絵）印刷を始める。</p> <p>□明治10年代後半から始まった技術改良にともなう品質の向上によって、輸出品の生産が増加し、美濃焼業界は好況に向かう。</p>		
	上絵石版				

時代	製品	尾張地方の動向	美濃地方の動向	窯	備考（美濃窯関係）
20 C 昭和		<p>昭和20年（1945）、太平洋戦争が終結すると、被災地からの需要が生まれる。 しかし、工業地帯の多くは米軍の空襲によって壊滅的な打撃を受けている。</p> <p>●名古屋・四日市の窯業地帯は、空襲によって壊滅的な状態となった。</p> <p>○戦災の被害が小さかった瀬戸に、日常品の注文が殺到する。</p>	<p>□戦火を逃れた多治見に日常品の注文が殺到する。</p>	石炭窯	

【参考文献】

- 『体系日本史叢書12 産業史Ⅲ』（小島敏雄 山川出版社 昭和41年） pp462～474
- 『日本やきもの集成3 瀬戸・美濃・飛騨』（植崎彰一編集 平凡社 昭和55年） pp85～93、112～117
- 『岐阜県史 通史編 近世下』（岐阜県 昭和47年） pp544～584
- 『岐阜県史 通史編 近代中』（岐阜県 昭和45年） pp494～495、862～889
- 『土岐市史 二』（土岐市 昭和46年） pp483～486
- 『土岐市史 三・下』（土岐市 昭和49年） pp184～231
- 『瑞浪市史 通史編』（瑞浪市 昭和49年） pp671～694、1174～1182
- 『多治見市史 通史編 上』（多治見市 昭和55年） pp196～222、321～350、351～370、967～972、973～1005、1005～1082、1082～1094
- 『多治見市史 通史編 下』（多治見市 昭和62年） pp1063～1074、1083～1149、1149～1179
- 『可児町史 通史編』（可児郡可児町：現可児市 昭和55年） pp136～157、157～172、172～188
- 『茄子川焼』（中津川市教育委員会 昭和58年） pp98～109
- 『岐阜県の歴史シリーズ⑩ 岐阜県歴史年表』（吉岡勲 郷土出版社 昭和63年）
- 『土岐津町史 上』（土岐市土岐口財産区 平成9年） pp134～146、199～210、211～227、227～247、544～579、580～635
- 『土岐津町史 下』（土岐市土岐口財産区 平成9年） pp1246～1270、1270～1312、1312～1332、1322～1349
- 『瀬戸市史 陶磁史編 一』（瀬戸市 昭和44年） pp314～323
- 『展示概要』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成元年） pp25～27
- 『特別企画展 明治時代の瀬戸窯業』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成5年） pp71～76
- 『企画展 川本柝吉展』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成7年） pp33～43
- 『新修 名古屋市史 第1巻』（名古屋市 平成9年） pp794～816、817～831
- 『新修 名古屋市史 第2巻』（名古屋市 平成10年） pp293～307
- 『企画展 陶磁胎七宝』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成9年） pp33～40
- 『特別企画展 近代日本陶磁の華 —シカゴ万国博覧会出品作品を中心に—』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成9年） pp100～101
- 『企画展 川本半助展』（瀬戸市歴史民俗資料館 平成10年） pp33～37